



川崎歴史ガイド

玉禅寺

ルート



旧王禅寺村



山王社下の石造物、「都築郡」と刻まれている

宝暦12(1762)年の王禅寺村絵図(志村家所蔵)

多摩丘陵にあって、川崎市域の北西部に位置する旧王禅寺村は、真言宗の名刹王禅寺をもつて、村名が付けられました。現在、その村域はほぼ麻生区の王禅寺・白山・虹ヶ丘地区にあたります。

王禅寺村は、戦国時代までは麻生郷の内に含まれていました。江戸時代の初期頃までは独立して一村となり、村高は一九二石でした。王禅寺村は、

初めは一代将軍徳川秀忠の夫人であるお江与の方に、嫁入りの際に与えられた領地(御化粧領)でしたが、お江与の方と秀忠が他界した後の寛永九(1632)年には、徳川家の菩提寺である芝・増上寺の領地(御靈屋領)となりました。

ところで、江戸時代の村の様子をうかがうことができる貴重な史料として、宝暦一二(1762)年の王禅寺村の絵図があります。絵図には色鮮やかに地形が描かれ、寺社・家・田畠・溜池・道・川などが記載されています。この地域は、標高七、八〇メートル程の丘陵が連なる起伏の多い地形で、鶴見川の支流に沿って大小多くの谷戸があります。村内は、絵図の中央を走る尾根道(ほねじゆうどう)を東側を表郷(ひょうごう)、西側を真福寺谷戸(まふくじやと)といいます。そして、谷戸を中心とする集落の共同生活の精神的な拠所として、王禅寺を取り巻くように、村の鎮守五社が谷戸の背後に配置されています。これら

日連上人入寂図（妙海寺蔵）



冬のお召講



六ヶ村名が刻まれている題目塔



自山地区の新百合グリーンタウン

ることなく、今日もほとんど変わらない位置にあり、これは周辺の地域では見ることができない珍しいことです。
どじょい ひよく

水も無い時代に、各戸の奥に溜池がありました。このように農業の自然条件には恵まれていて、せんでしたが、余業として柿栽培・炭焼きなどが行なわれました。特に柿は焼けたと呼ばれて広く知られ、江戸（東京）にも出荷されました。また、村の境や各谷戸には、目印となる松の木が存在し、「一本松・入合境松・這松など」の名称をみることができます。高石村との境にある「入合境松」は、楠樹（なんじゆ）で、都筑両郡の境をも示す、「弘法松」である。

寛政一年の題目塔とお召講

ると考えられます。

このような山深い里であった旧王禅寺村も、昭和四〇年代から大規模な宅地開発が進み、昭和三五（1960）年に九六四人であった人口が、現在では三万人を越え、かつての農村的な風景が、近代的な都市景観へと大きく変貌^{へんめう}しています。王禅寺村に息づいていた共同生活は、今日における地域生活のベースとなつているにもかかわらず、それが急速に失われつつあります。

しかし、残された古田や畠山、林煙、田畠や煙、山林が、今なお昔の面影を残し、講中の民間信仰や農耕儀礼が、継承されている所もあります。変貌する地域の歴史を見直す手立てとして、一枚の村絵図を通して、村全体がひとつ歴史的文化財とも考えられる旧王禅寺村に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

目塔とお召講

の講は旧六ヶ村が行い、冬の講は現在の町田・相模原市域の人々が行っています。夏の講では、毎年四月一五日に無病息災を祈つて、講中の人々が麻の着物（白い重ね）を一針一針交替でぬい、それを日蓮宗の開宗の日（千部会にあたる四月二八日に、米・酒と奉納金を添えて池上本門寺に献上しています。



旧六ヶ村、夏のお召講



麻布を裁断する

柿生トンネル跡

真福寺方面から、小田急線の柿生駅に出て、近道として、真福寺・王禅寺・早野の人々の願望と協力によつて、下麻生・早野の人々の願望と協力によつて、

り 昭和二十六（1951）年に川崎市域として初めて、長さ約六〇メートル程のトンネルが開通しました。

「…」
出るのに、学童の通学路である尾根を越える、大変急な坂道がありました。この道は、丸太で階段が組まれていて、したが、雨が降ればぬかるみに足を滑らせて、無理に引つ張ると下駄の鼻緒が切れたので、「下駄切り坂」と呼ばれていました。



彼岸花の咲く真福寺跡付近

真福寺は、王禅寺の末寺のひとつで、開山の年代は不明です。明治初年に廃寺となりました。(天保一四(1843)年)の「家作地坪絵図書上帳」(志村家所蔵)には、本堂二九坪、庫裏一二坪の平面図が記載されています。

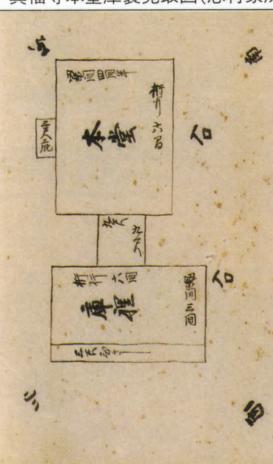
真福寺跡は、現在住宅地になつていて、ますが、元禄年間(1688~1704)の石仏などが並んでいます。これらの石仏は、かつて白山神社近くの路傍に置かれていたのを、この場所に移動したものです。

真福寺跡

山に囲まれ、南だけが開いている地形です。農民の連帯意識が強く、同じ王禅寺村でも、表郷（入口・谷戸・日吉）とは別にまとまつた集落を形成していました。そのため真福寺が廃寺となつてからも、この地区を指す名称となつています。

また、昭和四〇（1965）年頃から開発された百合丘団地が契機となつて、真福寺の光ヶ谷・這松・白山・島田地区は、急速に宅地化が進み、現在新百合グリーンタウンなどが出現していま

真福寺跡 現在は墓地が残っている 真福寺本堂庫裏見取図(志村家所蔵)



川崎市公一
四年から事務再開
山道を切り出
して上森地
内の森下トネ
路開拓玉井
らがこのよ
開通溝真福寺
した。市内で始め
てのトンネル道路
通へ一直
でいままで通
生、真福寺南は通
る山タキ寺とい
う山があつため
通行人は「里裏」
も通ることをして
いたが、この先で
は鉄筋で二重
築堤を作
業に奉仕



トンネル貫通、工事は中原区の堀一組だった



開通の記念写真



現在の切り通し、雪が降っても下駄の鼻緒が切れる事はない

たこともあるほどでした。また、自動車で柿生駅へ出るには、下麻生方面から遠回りをして行かねばなりませんで

このトンネルの開通によつて、周辺地域の人々が、柿生駅へ出るのに大変便利になりました。特にすぐ近所である真福寺の人々の喜びは大変なものでした。

しかし、戦後間もなくの工事であつたため老朽化で水漏れがひどくなり危険も感じられるようになつたので、昭和五三(1978)年に現在のような切り通しになりました。

白山神社

白山神社は、修驗道と関係の深い、加賀国（石川県）の白山神社の末社として、分霊を勧請したもので、王禪寺の鎮守五社のひとつです。祭神は、白山姫命で真福寺谷戸の鎮守となっています。

現在の祭礼は、九月七日に行われていますが、江戸時代には、祭礼の日は決められておらず、真福寺谷戸の人々の相談で決め、王禪寺の末寺である真福寺が執り行いました。

社殿は、嘉永四（1851）年に再建されましたが、そこに納められている本

殿側面の組物は、三手先斗柱で、いくつもの力強い龍がとりまき、特徴ある装飾的な建築様式を生み出しています。母口村（川崎市）の住人から寄進されたものです。拝殿の側面には、お百度参りの札があります。

また、白山神社は、虫歯をなおす神として古くから信仰され、萩の枝で作った箸を供えて祈願する習慣があります。

籠口の池と白蛇伝説

籠口の池は、真福寺川に沿った下麻生村の耕地をうるおす溜池でした。今日は稲作の水利組合の溜池から、雨水の調整池にかわり、籠口の池公園として、市民の安らぎの場となっていました。

周囲は、ほぼ原形のままコンクリートで固められていますが、以前は雑木林に囲まれた自然の池でした。

方から、籠口の池の水を飲みに来ました。そのため翌朝には付近の草が横たわっていたという話です。

王禪寺村が江戸時代初期にお江与の方の御化粧顔となっていたことにかかります。

わる言い伝えです。

また、籠口は、山に囲まれ、狭くなっている谷戸の入口に位置しています。

このような地形と「籠口」という地名から考えて、この場所が、古代には馬を放し飼いにした牧（牧場）であった可能性もあります。

現在の籠口の池



水田のイナゴ



イナゴの佃煮、重要な蛋白源だった

池付近の水田



本殿側面の彫刻、いくつの龍が彫られている

麻生不動院とダルマ市

麻生不動院の創建の年代は、明らかではありませんが、嘉永二（1849）年に王禅寺の末寺となり、真言宗豊山派に属するようになりました。

木賊を刈りに来た農民が木像を発見し、この地に祀つたという伝説から、木賊不動とも呼ばれ、火伏せの不動として広く人々に信仰されています。

一月二八日の初不動の日に穴あき銭をいただき、それを圍炉裏の自在かぎにかけておくと、火災などにあわないといわれ、一年間無事に過ごすと、穴あき銭を一枚にしてお返ししていまし

現在は相州ダルマを中心とする



農機具が展示販売されるのは珍しい

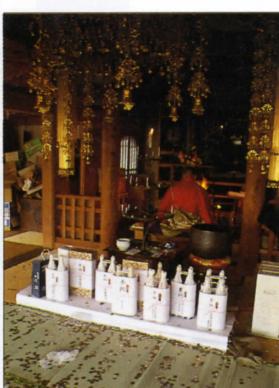
た。現在でも穴あき銭がお札の袋に入れてあります。

また、この日はダルマ市が立ち、多くの人々で賑わいます。ダルマが売られるようになつたのは、明治末期で、能ヶ谷（町田市）に住む露店商の池田

巳之吉が武藏村山から仕入れ、販売したのが初めであるといわれています。今は平塚市で作られているダルマが中

心です。

ダルマのほかに、境内や参道に日用品・熊手・植木・竹細工などを売る露店が多く出されますが、この市での特色は、農機具などを展示し、販売することです。



不動堂では護摩が焚かれる



境内には木賊があつた

下麻生学校と青戸四郎右衛門

明治五（1872）年に学制が発布され、王禅寺村の学童は、明治七（1874）年に開校された下麻生学校（前身は下麻生学舎）に下麻生・早野の学童とともに通うことになりました。そこで二〇年以上の長きにわたり、教鞭をとつたのが青戸四郎左衛門でした。

東京に勉強をしに行つたということです。

現在、青戸邦夫氏宅の庭には、大正一三（1924）年に、教子一四〇余名によつて建てられた四郎左衛門の報恩碑があります。また、東柿生小学校の校長室には、四郎左衛門の写真が「青戸塾を開き、下麻生学校の教育に尽力せらる」という言葉とともに飾られています。

四郎左衛門は、寺子屋を開いていましたので、下麻生学校が開校されると、そこに招かれたのでした。下麻生学校

では、寺子屋で教えていなかつた洋式算を教えなければならず、そのためにはまず自分が知る必要があると考え、

卒業候事

第一大學區神奈川縣管
第九中學區都筑郡下麻生村
明治十一年十一月廿四日
第十七四番小學

明治44年の四郎左衛門の写真
撮影場所は「内藤新宿」とある



昭和15年頃の下麻生分校



竹にのった油揚

稻荷社の社殿

禅寺丸の枝柿作り



王禅寺にある禅寺丸柿の原木

等海上人と禅寺丸柿

しましたが、入口谷戸付近ではまだそれを見ることができます。

新田義貞の鎌倉攻めの時に、焼失した王禅寺を再建するため、等海上人は、応安三（1370）年に寺の用材を求めて山中の奥深くに入りました。そこで甘みのある柿を発見し、村人たちに栽培を勧めたのが禅寺丸柿の始まりとされています。柿は飢饉の時には大切な食料ともなるため、王禅寺村および周辺村々の農家の庭先や畑に植えられるようになりました。江戸（東京）の市場に出荷され、街道筋の茶店でも枝ごとわらでしばり、店先につるして売られました。

北原白秋は、柿の実が潤む秋の柿生の里をこよなく愛し、その風情を歌に詠んでいます。王禅寺にある歌碑には「柿生ふる柿生の里」名のみかは禅寺丸柿。山柿の赤さを見ればまつぶさに秋は闇けたり」と刻まれています。

現在、禅寺丸の古木の多くは姿を消しました。

戸の森七郎の栽培した柿が明治天皇に献上されました。禅寺丸柿の生産は、大正期にピークとなり、新品種の出現や病害などにより、昭和初期には減少しました。

稻荷森稻荷社

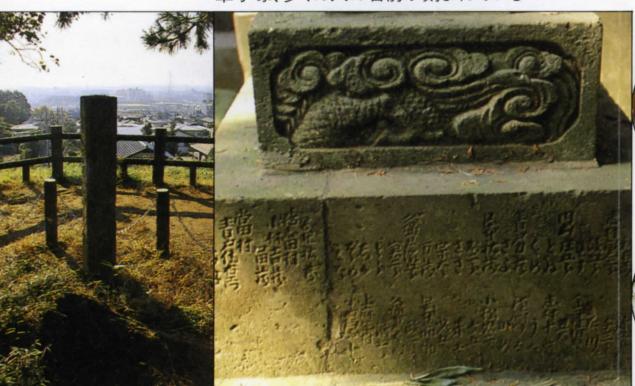
稻荷社は、王禅寺村の鎮守五社のひとつです。神明社とともに入口谷戸の鎮守となっています。現在の祭礼は、十月十日に琴平神社とともに行っていますが、江戸時代には、王禅寺が執り行っていました。

稻荷社は、隣に居住する久保倉氏の先祖が、村の安穏と五穀の豊穣を祈願して、京都伏見稲荷から分霊を勧請したものでした。勧請の年代は明らかではありませんが、江戸時代初期と考えられます。初めは久保倉氏の社でしたが、後に入口谷戸の鎮守となりました。

また、久保倉次郎右衛門は、江戸時代の文化から天保の頃に稻荷社の近くで寺子屋を開きました。この寺子屋で学んだ人々によって建てられた筆子塚には、「一五一人」という多数の名前が刻まれています。

稻荷社の西側にある七曲の坂は鎌倉道といわれています。鎌倉道は、鎌倉と各地を結ぶ主要な道のことですが、多くの支道があります。源頼朝の挙兵の報に接した義経の主従が、弘法松からこの付近を通って、鎌倉に駆けつけたという伝説があります。

筆子塚、多くの人の名前が刻まれている



弘法松跡の碑

禅寺丸最中



店先の禅寺丸柿

王禅寺の等海上人の碑

神明社

山の麓にある神明社は、王禪寺村の鎮守五社のひとつです。祭神は天照大神・大国主命で、近くの山頂にある稲荷社とともに、入口谷戸の鎮守となっています。現在の祭礼は、十月十日に神明社とともに行っていますが、江戸時代には王禪寺が執り行いました。

神明社は、初めは吉垣氏の社でした。が、後に入口谷戸の鎮守となりました。臣で、天正一八（1590）年に豊臣秀吉が小田原を攻めた時に、白山谷戸の陣屋に立て籠つて戦つたといわれています。

石橋供養塔

神明社とともに、吉垣氏は後北条氏の家が、吉垣氏は後北条氏の家が、後北条氏が滅亡すると、白山谷戸から神明社付近に移り住みました。その子孫である三十郎は、江戸時代初期に王禪寺村の名主を務めています。

貞享元（1684）年の神明社の棟札には、吉垣宇兵衛の名前を頭に氏子三九名の名前が書かれています。その内吉垣・井上・志村など、苗字の書かれている人たちは、村の指導的な立場にあつたと考えられます。

貞享元年の棟札は、火災で焼失しましたが、現在天保五（1834）年の棟札が残されています。

天保5年銘の入った棟札



石橋供養塔と高札場

旧王禪寺村と旧早野村との村境にあたる、早野川に架けられていた石橋は、文政二（1829）年に王禪寺村の青戸伝治郎が中心になってつくったものです。伝治郎は、井戸に身を投げた養女よしの供養のために、往来の激しかったこの場所に石橋を架けようと考え、率先してお金を出し、また周辺の村々から募金を集め、一三年の年月をかけて完成させました。

江戸時代のことですから、石材で橋をつくることは珍しく、しかも通行が安全になつたので、王禪寺や早野の人々

は「王禪寺大橋」と呼び、大変喜びました。現在は、石橋は取りこわされていますが、この場所に天保二（1841）年に再建された石橋供養塔が、道祖神などの石仏群とともに並んでいます。

なお石橋の柱石の一部は、琴平神社の近くにある王禪寺会館の庭に保存されています。

また、宝曆二（1762）年の王禪寺

村の絵図によれば、道をはさんで供養塔の東側に高札場がありました。高札場は、村人のための掲示板の役割を果たしていました。したがつて、この地

域は人々が集まる村の中心的な場所であつたといえます。



高札場跡付近

石橋供養塔と並ぶ石仏群

石橋供養塔と並ぶ石仏群



がまんさん



春の琴平神社

琴平神社

王禅寺村の名主を務め、芝・増上寺の御靈屋領二五ヶ村の取締名主を兼ねて、讃岐（香川県）の金刀比羅宮の分靈を勧請し、神明社と合祀しました。昭和五五（1980）年には、神明社琴平社

合社を琴平神社と改名し、「柿生のこんぴらさん」と呼ばれ信仰されています。

本殿入口の石鳥居の上には、烏天狗の石像が向かい合っています。拝殿前の右手にある手水鉢を支えている四方の邪鬼は、「がまんさん」と呼ばれています。拝殿には、海上の安全を願い、

正月には神事として、一年の厄除け、無病息災を祈り、「茅の輪くぐり」が行われています。

現在の琴平神社は、山上の社殿のほ

海を描いた大きな絵馬が奉納されています。

なお、神職の志村氏が所蔵している王禅寺村の江戸時代の古文書は、その数が約一千点に及び、この地域や増上寺御靈屋領を知る上で貴重なものといわれています。

比川社（旧第六天社）

比川社は、王禅寺村の鎮守五社のひとつです。祭神は、素戔鳴尊、稻田姫命、大己貴命で、谷戸の鎮守となっています。現在の祭礼は、十月十日に琴平神社とともに行っていますが、江戸時代には、金剛院が執り行いました。

金剛院は、王禅寺に付属して境内に建てられていた寺院のひとつです。付属の寺院は、仁王門に通ずる参道の両側に五ヶ寺ありましたが、現在はすべて廃寺となっています。

比川社は、旧称を第六天社といいました。密教によると、天上には八方位

が、麓に大鳥居や儀式殿などが建立され、この地域で最も大きい神社のひとつになっています。

明治維新の神仏分離の時に、埼玉県大宮市にある氷川神社（武藏一之宮）の分霊を勧請して、比川社となりましたが、現在でも、地元の人々は、比川社と呼ぶより、古くからの名称である第六天社と呼ぶほうが多いようです。

比川社の社殿



正月に行われる茅の輪くぐり

正徳2年の王禅寺の絵図（志村家所蔵）、参道には付属寺院が描かれている



門前の提灯、「金」と読む

化粧面谷公園とお江与の方

宝暦一二（1762）年の王禅寺村の絵図には、中央部の尾根道の東側に、「けいめん谷」という小字があります。

「けいめん」とは「化粧」のことで、「めん（免）」は、「年貢の免除」などを意味しています。現在この場所は、梨の木

団地の一帯にあたり、「化粧面」と表示と発音されています。

この地名は、王禅寺村が江戸時代初期に、二代将軍徳川秀忠の夫人であるお江与の方の御化粧領であったことからつけられました。お江与の方は、織



自然に囲まれた化粧面谷公園

田信長の妹のお市の方と浅井長政との間に生まれた三女で、豊臣秀吉の側室である淀君の妹にあたります。寛永三

（1626）年に亡くなりましたが、彼女の葬儀には、王禅寺村の名主・年寄をはじめ、御化粧領の百姓三五〇人が召し出され、御棺かつぎや葬儀のお供を

命ぜられたといわれています。王禅寺村は、お江与の方の御化粧領であつたから、その後増上寺領となつたことなど

から、徳川將軍家と深いつながりを持ち、幕府からの諸役の負担を一部免除されました。



若葉の仁王門



花咲く境内



境内の六地蔵

星宿山王禅寺

新義真言宗豊山派の古刹で、本尊は聖観音菩薩です。『縁起』によれば、奈良時代に建立されたとなっていますが、延喜一七（917）年に無空上人によって開山されたという説もあります。新田

（1584）年に北条氏直によって麻生郷内に三〇貫文の寺領が認められ、寛永一九（1642）年には、江戸幕府から朱

印地として三〇石が与えられています。仁王門の上の階段を登ったところに位置する本堂（觀音堂）は、嘉永四（1851）年に再建されていますが、寄棟造の建物で、室内構成は密教建築の特徴があります。

一般に村落の寺院は、戦国から江戸時代初期に開創されたものが多い中で、たくさんの末寺や付属寺院を持つてた王禅寺は、この地域で古い由緒を持つ寺院のひとつです。

公園付近の表示板



市民の憩いの場となつてゐる公園の名称には、このような歴史的な由来があります。

山王社(日枝神社)

山王社は、王禪寺村の鎮守五社のひとつです。祭神は大山咋神で、日吉谷戸の鎮守として、近郷の人々に深く信仰されていました。現在の祭礼は、十月十日に琴平神社とともに行っていますが、江戸時代には王禪寺が執り行つていました。

この社は、王禪寺の東北側の鬼門除けに建てられていることもあって、他の社より王禪寺とのつながりを深く持つていました。

山王社の勧請年代は不明ですが、志村家所蔵の由緒書には、徳川秀忠の夫人であるお江与の方の御化粧領であつ

た時に、造営されたと記載されていることから、江戸時代初期と考えられます。また、山王社が勧請された後に、この谷戸を日吉と呼ぶようになったといわれています。

宝暦二年(1762)年の王禪寺村の絵

図には、山王社は、現在より東寄りの道路に面した低い場所にありました。文政期(1818~1830)に疫病が流行し、その時に、村民が社を現在の山頂の位置に移したといわれています。

なお、社殿は寄棟造ですが、その中に納められている流造の本殿は、小建築ながら立派なものです。



寄棟造の社殿

村境の石仏群

旧石川村との境にあたる路傍に、ひとつそりと地藏菩薩、庚申塔、地神塔、馬頭観音などの一群の石仏が建てられています。これらの石仏の多くは、日吉谷戸の辻(道路の交差する所)などにあつたものを、この場所に移動したものといわれています。

日吉谷戸の人々は、災いを防いで、

あるいは豊作を祈願し、そして農耕馬の供養をするなど、さまざまな民間信仰を持ち、谷戸の連帶を強めていました。これらの石仏群は、それぞの信仰

行事のシンボル的な存在がありました。



石仏たち



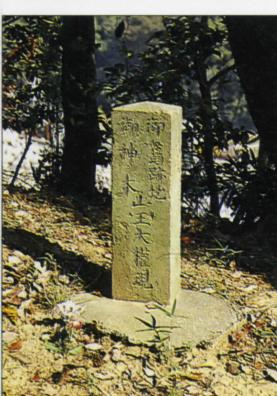
近くにある犬猫墓苑



早野のセイノカミ、かつてはこの付近でも行われていた



参道



旧社地碑、前は旧社殿跡にあった

◎参考文献

柿生の教育のあゆみ ● 柿生の教育のあゆみ編纂委員会 ■ 柿生の教育のあゆみ刊行会・昭和55年
近世農村構造の史的分析 ● 長谷川伸三 ■ 柏書房・昭和56年
麻生区の神社と寺院 ● 川崎市博物館資料収集委員会 ■ 昭和62年
川崎市史 資料編1(考古・文献・美術工芸)、資料編2(近世)、別編(民俗) ● 川崎市 ■ 昭和63年~平成3年
王禅寺村 ● 浜田利明 ■ 昭和63年
ふるさとは語る—柿生・岡上のあゆみ— ● 柿生郷土誌刊行会 ■ 平成元年
歩け歩こう麻生の里 ● 川崎市麻生区老人クラブ連合会伝承委員会 ■ 平成元年
川崎の町名 ● 日本地名研究所 ■ 川崎市・平成3年
麻生区図 ● 川崎市都市整備局 ■ 承認番号川崎市指令都計第3-62号

◎資料収集協力者

青戸邦夫 池田定男 王禅寺 古沢莊一 琴平神社
鈴木七五三 中山茂 中山孝美 白山神社 堀一久安
妙海寺 森潤一 (敬称略)



日吉谷戸の菖蒲



●川崎歴史ガイドのシンボル・マーク

このシンボル・マークは、古代の鏡を現わしています。歴史は私たちの祖先がつくりだしたものですが、それを再び映したのが、川崎歴史ガイド計画です。シンボル・マークは、歴史を甦らせ、映したす鏡です。ガイド用の“柱”の上に、それが必ずついています。

デザイン=栗津 潔

ガイドパネルデザイン=栗津 潔+清水まこと

Design=川村 易 Photo=小池 汪

公益財団法人 川崎市文化財団

〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町12-1タワーリバーアーク3階

☎044-222-8821 FAX044-222-8817 領価110円

王禅寺ルート



エチケット

■町の歴史めぐり。寺の境内に吸いがらが投げ捨てられていたり、町角がゴミや空きカンでよこれているのを見るのは残念です。せめてエチケットだけは守りたいもの。

■呼び出されてあれこれ聞かれるのも、その人にとっては迷惑な場合も多いでしょう。

■「古き時代を訪ねて」、といつても今は交通も頻繁です。くれぐれも交通事故に気をつけて下さい。

川崎歴史ガイドパネル所在地

- | Aパネル | Bパネル | Cパネル |
|----------------|------|---------------|
| ①総合案内板 | | 麻生区上麻生1065 |
| ②寛政11年の題目塔とお召講 | | 麻生区上麻生407 |
| ③柿生トンネル跡 | | 麻生区上麻生450地先 |
| ④真福寺跡 | | 麻生区王禅寺2032地先 |
| ⑤白山神社 | | 麻生区白山4-3-1 |
| ⑥籠口の池と白蛇伝説 | | 麻生区下麻生1173 |
| ⑦麻生不動院とダルマ市 | | 麻生区下麻生801 |
| ⑧下麻生学校と青戸四郎左衛門 | | 麻生区王禅寺130 |
| ⑨等海上人と禅寺丸柿 | | 麻生区王禅寺87 |
| ⑩稻荷森稻荷社 | | 麻生区王禅寺195 |
| ⑪神明社 | | 麻生区王禅寺200 |
| ⑫石橋供養塔と高札場 | | 麻生区王禅寺239-2地先 |
| ⑬琴平神社 | | 麻生区王禅寺318 |
| ⑭比川社 | | 麻生区王禅寺388-1 |
| ⑮化粧面谷公園とお江与の方 | | 麻生区王禅寺450 |
| ⑯星宿山王禅寺 | | 麻生区王禅寺940 |
| ⑰山王社 | | 麻生区王禅寺911 |
| ⑱村境の石仏群 | | 麻生区王禅寺912 |

お詫びと訂正

「下麻生学校と青戸四郎右衛門」項の本文中と
ルート図⑧にある青戸四郎左衛門は、青戸四郎
右衛門の誤りです。なお、報恩碑は平成十八
(2006)年九月に川崎市立柿生小学校に移築さ
れました。

「注意

王禅寺ルートの一部には、道幅が狭く、自動車
が頻繁に通るところがあります。交通事故には、
くれぐれもお気を付け下さい。